

《論文》

養護教諭養成課程の養護実習の成果を向上させるための実習前と実習後の指導法の研究\*  
—実習前の認識と実習後の認識の相違分析を通して—

A Study of Teaching Methods Before and After Teaching Practice to Improve  
Achievements of Yogo Teacher Training Course  
— Through Analyses of Differences in Recognition Before and After the Practice —

大 原 榮 子\*\*・葉 山 栄 子\*\*\*

OHARA Eiko・HAYAMA Eiko

はじめに

養護実習に関する調査研究はこれまでも数多く見られるが、それらは実習の効果や実習生の自己評価、実習に対する実習生の満足度の研究が多いといえる。しかし、養護実習を行なう実習生は実習をするという意欲もさることながら、養護実習を実施することに大きな不安を抱えているのではないだろうか。

大谷・大原ら（2008）<sup>1)</sup>は「教員（養護教諭）を志望する学生にとって臨地実習としての教育・養護実習は、その職への志向を高める上で、貴重な機会となる。また、自らに、適正があるかどうか不安を抱えている実習生は、指導者の姿勢や発する言葉に反応している」と養護実習の意義および養護実習中の実習生の不安を示唆している。

本学においては、養護教諭免許取得のために、2年次の4月から3週間を基本として養護実習を実施している。しかし、実際には実習先の関係で6月までの間に全員の実習を終えた。実習先は母校の高等学校での実習が多いが学校事情によって義務教育の学校での実習生がいる。このように、実習先が異なるため、実習校の校種、学校規模、地域等の違い等から、実習内容の違いが出てくることが予想される。また、学生からは、入学間もない頃から1年後の養護実習に対して、学校現場での実習への期待と同時に大きな不安を抱いている話を耳にすることがある。

養護実習の最終週に「総合実習日」として一日設定を依頼している。教育実習生の場合の研究授業にあたるものとして、実習生が一日の計画を立てることから始まり、保健室での終日を運営する総仕上げともいえる実習をさしている。この総合実習の一日を通して、養護教諭に指導を受けることとしている。

養護実習は、教育職員免許法第5条に基づき定められている。本学のカリキュラムにおいては、養護実習だけではなく、養護実習の前後に、「実習指導」1単位のカリキュラムを組み実施している。

養護実習の目的は、今までに履修した一般教養、教職教養、養護に関する専門的科目を教育の現場において実践的に展開を図ることであるとしている。しかし、前述したように、養護実習に対して学生が大きな不安を抱えている現状から、養護実習前に、学生はどのような不安を持っているのか実態を明らかにし、不安の軽減を図る必要があると考えた。不安の軽減については事後指導において、実習中での困ったことやその対応の在り方等を振り返ることで、実習前の不安がどのように変化していったかをみることが重要であると考えた。

本研究では、養護実習における実習前の不安が実習中にどのように認識されていったかについて

\* 2012年9月14日受理

\*\* 名古屋学芸大学短期大学部

\*\*\* 名古屋学芸大学短期大学部非常勤講師

検討し、事後指導の在り方について考察することを目的とする。そこで、学生自身がどのような不安を抱えているのか、また、指導において困ったことについての対応の在り方について調査した。

## 1. 研究方法

### 1) 養護実習前

- (1) 対象：本学養護教諭モデル2年次学生 47名
- (2) 時期：2009年9月～3月
- (3) 方法：質問項目（5項目）は自由記述式とし質問紙には学生番号を付してもらった。  
「1 実習前の不安」「2 疑問に思っていること」「3 養護実習で一番自分がしていきたいこと」「4 心がけて行いたいこと」「5 あなたがイメージする養護教諭とは」

### 2) 養護実習後

- (1) 対象：本学養護教諭モデル2年次学生 47名
- (2) 時期：2010年6月～7月
- (3) 方法：養護実習指導は、事前の指導に加え、実習終了後の指導を行うことを目的に、多くの学生が実習を終えた5月から事後指導の授業を10回実施した。  
授業の進め方は学生が4～5名でグループを編成し、事後指導（表1）の内容を実習校別の経験と不安疑問についてまとめ発表を行なうものであった。その内容について指導者から具体的な問題点を提示し学生に意見交換させ、対応のあり方について指導を行なった。

表1 養護実習事後指導日程

回数	日 程	内 容
1	5/10（月）	養護実習ふりかえり・発表グループ決め
2	5/17（月）	救急処置場面で困ったこと
3	5/24（月）	内科処置場面で困ったこと
4	6/07（月）	精神的処置場面で困ったこと
5	6/14（月）	健康診断等の準備・実施・事後指導での反省
6	6/21（月）	保健指導・保健学習について
7	6/28（月）	他教員との連携 外部機関との連携
8	7/05（月）	健康観察・欠席調べ・早退者への対応 不登校児童生徒への対応
9	7/12（月）	校内巡視・環境検査・一日の執務計画
10	7/19（月）	総合実習・実習中の失敗・感動・ 実習全体について
11	7/26（月）	予 備

## 2. 結果

### 1) 養護実習前

養護実習前の時点で「1 実習前の不安」「2 疑問に思っていること」「3 養護実習で一番自

分がしていきたいこと」「4 心がけて行いたいこと」「5 あなたがイメージする養護教諭とは」の5項目について自由記述で回答させた（表1～表5）。複数で記述された文章のキーワードについてカテゴリー化した。

### （1）養護実習前の不安

「1 実習前の不安」を表2に示す。児童生徒への対応（17名）、応急処置（15名）、職務実施の不安（14名）に対する不安等が挙げられた。

表2 実習前の不安

複数回答（人）

内 容	カテゴリー
・保健室対応（10）・児童生徒への接し方（7）	対応（17）
・応急処置（11）・判断基準（4）	応急処置（15）
・歯科検診実施内容（5）・健康診断実施内容（3）・実施時準備（1） ・健康診断以外のことが本当にできるか（2）・保健室運営（3）	職務実施の不安（14）
・保健教育内容（5）・保健教育の方法（3）・保健教育の指導力（4）	保健教育（12）
・職員との連携・児童生徒との連携（11）	連携（11）
・個人研究実施への不安（8）	個人研究（8）
・知識不足（5）・養護教諭として学校現場での行動（3）	知識・行動（8）
・教師としての対応（3）・指導力（2）	教師力（5）
・総合実習（1）	総合実習（1）

### （2）疑問に思っていること

「2 疑問に思っていること」を表3に示す。応急処置（16名）が一番多かった。次に実習の範囲・判断（6名）、対応（6名）が挙げられる。応急処置については、現場においても養護教諭に期待される職務の一つであることから重視していかなければならない。

表3 疑問に思っていること

複数回答（人）

内 容	カテゴリー
・処置時の対応（6）・応急処置の実施内容（6）・応急処置の判断（4）	応急処置（16）
・実習内容（3）・実施判断（2）・実習範囲（1）	実習の範囲判断（6）
・生徒への接し方（4）・言葉遣い（2）	対応（6）
・生徒との連携（2）・担任と他の教師との連携（2）・連携の方法（1）	連携（5）
・職務分担（2）・一日の流れ（1）・具体的な職務（1）	職務分担・流れ（4）
・校内巡視の実施時期（2）・校内巡視の実施方法（1）	校内巡視（3）
・保健室の実態（1）・学校の実態（1）	現場の実態（2）

### （3）養護実習で一番自分がしていきたいこと

「3 養護実習で一番自分がしていきたいこと」について表4に示す。主に相談等の具体的な活動（14名）が挙げられる。

表4 一番自分がしていきたいこと

複数回答 (人)

内 容	カテゴリー
・生徒の観察・対応 (5)・健康観察、相談 (3)・健康診断 (2) ・校内巡視 (1)・保健室経営 (1)・保健指導 (1)・応急処置 (1)	職務の具体的活動 (14)
・職務内容の把握 (1)	職務内容の把握 (1)

## (4) 心がけて行ないたいこと

「4 心がけて行ないたいこと」について表5に示す。主に社会性(15名)、積極性(7名)、対応(6名)、職務の基本(6名)等が挙げられた。

表5 心がけて行ないたいこと

複数回答 (人)

内 容	カテゴリー
・立場 (3)・行動、態度 (3)・姿勢 (2)・責任 (1)・自覚 (3) ・笑顔 (1)・挨拶 (1)・礼儀 (1)	社会性 (15)
・積極的 (2)・知識、技術を吸収 (2)・養護教諭への志向 (2)・自信 (1)	積極性 (7)
・対応 (4)・生徒との距離 (2)	対応 (6)
・連絡、報告、確認 (3)・観察 (2)・判断 (1)	職務の基本 (6)
・謙虚 (4)	謙虚 (4)
・体調管理 (1)・安全管理 (1)	自己管理 (2)

「謙虚」と回答した中には具体的に「実習をさせていただく身であること」といった記述も見られた。このことは授業担当者から指導されているところでもあり、それが理解できていると捉えることができる。

## (5) カテゴリーでの分類

「1 実習前の不安」、「2 疑問に思っていること」、「3 自分がしていきたいこと」、「4 心がけて行ないたいこと」の4つの質問項目について、カテゴリーの結果を表6に示す。

表6 カテゴリーでの分類

複数回答 (%)

1 実習前の不安	2 疑問に思っていること	3 自分がしていきたいこと	4 心がけて行ないたいこと
対応 (36.1)	応急処置 (34.0)	職務の具体的活動 (29.8)	社会性 (31.9)
応急処置 (31.9)	対応 (12.8)	職務内容の把握 (2.1)	積極性 (14.9)
職務実施の不安 (29.7)	実習の範囲判断 (12.8)		対応 (12.8)
保健教育 (25.5)	連携 (10.6)		職務の基本 (12.8)
連携 (23.4)	職務分担・流れ (8.5)		謙虚さ (8.5)
個人研究 (17.0)	校内巡視 (6.4)		自己管理 (4.3)
知識・行動 (17.0)	現場の実態 (2.1)		
教員力 (10.6)			
総合実習 (2.1)			

「1 実習中の不安」では、主に対処36.1%、応急処置31.9%、職務実施の不安29.7%であった。「2 疑問に思っていること」では、主に応急処置34.0%、対応12.8%、実習の範囲判断12.8%であっ

た。「3 自分がしていきたいこと」では、主に職務の具体的活動29.8%であった。「4 心がけて行ないたいこと」では、主に社会性31.9%、積極性14.9%、対応12.8%であった。

(6) あなたがイメージする養護教諭とは

「5 あなたがイメージする養護教諭とは」について、主な内容を表7に示す。専門性(31名)、次に受容(16名)であった。

表7 養護教諭のイメージ

複数回答 (人)

イメージする内容	カテゴリー
・連携(7)・組織(2)健康管理(12)・判断(2)・知識、技術(2) ・対応(2)・健康相談(3)・学校安全(1)	専門性(31)
・暖かい(8)・包容力(6)・母親的(2)	受容(16)
・信頼(3)	信頼感(3)
・経験豊富(2)	経験(2)

## 2) 事後指導

養護実習指導は、事前指導と事後指導から構成している。多くの学生が実習を終えた5月から事後指導の授業を10回実施した。(表1)

(1) 授業の結果

10回の中の2、3、4、10回目について表8～表11に示す。

### ①救急処置

対象：実習を終えた学生 27名(小学校2名、高等学校27名)

救急処置で困ったこと、対応について表8に示す。

表8 救急処置で困ったこと、対応

項目	具体的内容
困った場面	○救急処置場面
事例	○問診の進め方 ・砂がとれずに困った。 ・2、3段上の階段から落ちた生徒に対して、同じ箇所に打撲と擦り傷があり、湿布の方が良いのか、絆創膏の方が良いのか。
指導	・事例1では、薄めた消毒液にしばらく浸しておいて、それから綿球で傷口をポンポンと叩く ・処置前には主症状を聞き、緊急性の有無を確認すること。 ・処置は、処置台で行うこと。 ・生徒の痛みを緩和すること。 ・生徒を不安にさせない、声かけをする。対応は大きさでもよい。 ・救急車が必要なときは、すぐに救急車を要請する。すぐに保護者へ連絡する。 ・仕事の内容は、経験が必要。救急処置の方法は、たくさん練習をする。 ・プライバシーを守る。個人情報を守る。 ・記録を常にとり続けること。

まとめ	<p>勉強不足のため救急処置の場面で焦ったり、困ったりしてしまった。困った内容は、頭部打撲や突き指などの処置方法、問診のしかた等、様々であった。このことから、普段授業で教わっていること全てが養護教諭の職務と繋がっていると改めて感じ、養護教諭には幅広い知識が必要であると再確認できた。</p> <p>実習を行ってきた学生が応急処置で困ったことを解決するには、幅広い知識を身につけることであると考えた。また、救急時にすばやく対応するために、起こりうるけがを想定し、処置に必要な道具をいつでも揃えておくこと、その道具の清潔を決して怠らないことも必要である。幅広い知識を持ち、普段からの道具の管理をすることで、救急時の処置を臆することなく行うことができるのではないかなと思う。</p>
-----	--

## ②内科処置

対象：実習を終えた学生 29名（小学校2名、高等学校27名）

内科処置で困ったこと、対応について表9に示す。

表9 内科処置で困ったこと、対応

項 目	具 体 的 内 容
困った場面事例	<p>○判断、対応（以下具体的場面）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「気持ちが悪い」と訴えて来室したが、問診をしても何も答えない生徒への対応</li> <li>・生理痛と下痢に加え、「薬が欲しい」と言って来室した生徒への対応</li> <li>・「休養または早退をしたい」と言って来室した生徒への対応（平熱、元気な様子）</li> <li>・頭痛・腹痛を訴える頻回来室者への対応</li> <li>・頭痛・腹痛を主訴として来室したがバイタルサイン等に異常がみられない生徒への対応</li> <li>・養護教諭は教室復帰を考えるが、生徒自身が保健室から教室へ帰ろうとしない場合の対応</li> <li>・教室に帰す、休養、早退の判断</li> <li>・本当に体調が悪いのかの判断</li> <li>・熱はないが、咳と体調不良を訴えた生徒の休養の判断</li> <li>・養護教諭の判断はベッド休養だったが、生徒自身は座って休養したいと言っている場合の対応</li> <li>・温めるのか、冷やすのか、炎症性のものなのかの判断</li> <li>・「腸にガスがたまった」と訴え来室した生徒への対応</li> <li>・寝不足の生徒のベッド休養の是非</li> <li>・精神的な下痢の対処法が分からなかった。</li> <li>・1時間休養しても良くならない場合、どう対応するか</li> <li>・外国人子女（中国人）への対応 持病あり</li> <li>・目に見えない症状は判断が難しい</li> </ul>
指 導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・原則として保健室では内服薬を与えない・薬を処方するのは医師の職務である。</li> <li>・学校では、応急処置の範囲内で対応する。</li> <li>・アレルギーや副作用の心配があり、服用後の観察が十分にできない。</li> <li>・「投薬」は「治療」の領域で、医師の指示・指導の下に行われるものである。学校で児童生徒の訴えや要求に、内服薬を与えることは、医療行為と考えて控える。児童生徒や職員に「保健室は薬をもらうところではない」という認識をさせ、病院や薬局と保健室との役割の違いを説明する。</li> </ul>

指 導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内服薬は、一切置かないようにする</li> <li>・児童生徒各自で常備薬を持ってくる</li> <li>・外国人児童・生徒については、多くの市や県によって対策がとられている。特に多い都道府県や市町村では、「保健調査票」、「緊急連絡先カード」等必要な書類はポルトガル語、英語、中国語、スペイン語などで表示されたものがある。各学校の現状を把握し、その都道府県や市町村の方針に従って対応すること。</li> </ul>
まとめ	<p>主に早退、休養、教室に戻す判断に困った。各学校で対応方法は異なるが、基本的判断基準や、症状、病気の理解は共通である。同じ症状でも生徒の訴え方はさまざまである。そのため養護教諭は、生徒一人一人を観察しそれにあった対応をすることが必要である。また、単なる体調不良であると軽視するのではなく、重大な疾病が隠れている可能性があることも忘れてはならない。保健室でいち早く養護教諭が対応するためには、病気についての知識を十分に持たなければならない。そして、日常の健康観察から児童生徒の健康状態を把握しておく必要がある。</p>

### ③精神的処置

対象：実習を終えた学生 29名（小学校2名 高等学校27名）

精神的処置で困ったこと、対応について表10に示す。

表10 精神的処置で困ったこと、対応

項目	具 体 的 内 容
困った場面 事 例	<p>○精神的処置場面</p> <p>1 泣いた生徒への対応</p> <p>(1) 主訴は腰が痛いと来室。しかしその生徒は精神的に弱い。 そこでスクールカウンセラーを勧めたら泣いてしまい対応に困った。</p> <p>(2) 話を聞いているうちに泣き出してしまった。</p> <p>(3) 保健室に来室してからひたすら泣いていた児童生徒。何を質問しても黙ったままで1時間ずっと泣いていた。理由不明で対応に困った。</p> <p>2 落ち着きがない子への対応</p> <p>(1) 叫んでいる子への対応。</p> <p>(2) テンションが高かった子への対応。</p> <p>(3) 軽度のアスペルガー障害を持つ児童生徒への対応と周りの児童生徒への説明の仕方。(周りの児童生徒にいたずらをされて興奮状態)</p> <p>3 身体的症状を訴えて来室した生徒の対応</p> <p>(1) 身体症状を訴え来室。悩みの相談をできるほどの人がいないとわかる。</p> <p>(2) リストカット等への対応に戸惑ってしまった。</p> <p>4 主訴が分からない</p> <p>(1) 「お母さんに会いたい」だったのが、母親との登校に変わり、教室に行けず階段のところで母親と座り込んでしまった。</p> <p>(2) 友人関係でうまくいっていない生徒が来室した。</p> <p>(3) クラスでなじめない生徒が来室した。</p> <p>(4) 何を質問しても黙ったままであった。</p> <p>(5) 理由不明であった。</p> <p>(6) 生徒が一言も何も話さない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒に話しかけてみた。</li> <li>・生徒に質問をしてみた。</li> <li>・困ってしまい、何もできなかった。</li> <li>・なんて声をかけて良いのか分からなかった。</li> <li>・何を質問しても黙ったままであった。</li> </ul>

指 導	<div data-bbox="416 197 786 230">1 泣いている生徒への指導</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・泣くことでスッキリする。落ち着くまで無理やり聞き出さない。</li> <li>・泣いている生徒にティッシュ等を渡し落ち着かせる。個別の空間を作ることも良い。</li> <li>・生徒の腰痛の訴えを聞く。生徒にとって寝ている体勢の方が良い場合は、ベットやソファ等を使い生徒の楽な体勢にさせる</li> </ul> <div data-bbox="416 427 815 461">2 落ち着きがない子への指導</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保健室で休養している児童生徒がいる場合、その児童生徒に迷惑がかかるため、なるべく落ち着かせる。それでも落ち着かないときは、他教員との連携をとり、別室にて様子を見る。保健室に休養している児童生徒がいない場合は、保健室にて落ち着かせ、様子を見る。</li> <li>・周りの児童生徒への影響を考える</li> <li>・学校での児童生徒への対応については、連携をしながら話し合っていく。</li> <li>・特別視はせず、他の児童生徒と変わらない接し方をする</li> <li>・自己判断で他の児童生徒に障害児であることを告知等はしない。</li> </ul> <div data-bbox="416 770 984 804">3 身体的症状を訴えて来室した生徒の対応</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・心理的要因があったとしても、まずは症状に対して対応を行う。バイタルサインのチェックや痛みの個所に手を触れて確かめる。気のせいや精神的なものと最初から決めつけてしまわないこと。手当をして、会話をしていく中で徐々に心を開き、話しやすい場を提供する。受容・共感的に話を聞いていき、同時に聞きながら考え、考えながら聞くことが必要である。</li> <li>・観察・バイタルサインのチェックなどを行う。</li> <li>・養護教諭が相談相手になろうという気持ちを持ち「今悩んでいることや、不安に思っていることがあったら話を聞こうか」と生徒に問いかけてみる。そこで生徒が悩みを口にしたら、養護教諭は受容・共感的にはなしを聞いていく。もし、生徒が黙り込んでしまったときや、話したくないと言ってきた場合は、無理に聞きださない。</li> <li>・生徒は“相談できるほどの人が周りにいないこと”が悩みであり、養護教諭に明かしている。そのことを受け止め相談活動をすすめる。また、担任と連携を図り教室や日常での生徒の様子を知るよう努める。</li> <li>・自傷行為をしていることを叱責や迷惑視しない。</li> <li>・本人を温かく受け入れ、愛情を注ぐ。</li> <li>・本人の気持ちを傾聴する。</li> <li>・落ち着いたら本人に納得させて、医師の診断を受けさせる。</li> <li>・軽い傷であっても軽視せずに、自傷行為や自殺を試みた背景に対してしっかり対処して、再び試みないよう、未然に防ぐ。</li> </ul> <div data-bbox="416 1561 871 1594">4 主訴が分からない生徒への対応</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒にとって保健室を安心できる場にする。</li> <li>・養護教諭がゆとりをもって本人に接する。</li> <li>・焦らずに日にちを重ね、じっくり対応する。</li> </ul>
-----	--

## ④総合実習

対象：実習を終えた学生 28名（小学校 4名、高等学校 24名）

総合実習で困ったこと、対応について表11に示す。

表11 総合実習で困ったこと、対応

項 目	具 体 的 内 容
困った場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・優先順位のつけ方に迷った。</li> <li>・授業復帰、保健室休養、帰宅の判断に困った。</li> <li>・問診内容が不十分だった。</li> <li>・十分な保健指導ができなかった。</li> <li>・複数配置だったが実習生一人で行ったことが大変だった。</li> <li>・来室した生徒が実習生を無視して養護教諭のところへ行ってしまった。（短期間だったため信頼関係を築くことができていなかった）</li> <li>・予想以上に来室者が多かった。</li> <li>・生徒対応の際、自分で判断しきれず先生に助言していただいた。</li> <li>・来室した生徒の救急処置が上手くできなかった。</li> </ul>
総合実習で実際に行ったこと	保健室整備、生徒対応、など日常養護教諭が行う執務全般を行った。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・薬品点検</li> <li>・環境整備（水質検査・換気・温度・湿度の測定）</li> <li>・校内巡視</li> <li>・外科処置（肉離れ・靴擦れ・擦過傷・骨折・突き指・捻挫等）</li> <li>・児童生徒の対応</li> <li>・健康診断・健康診断の事後指導・健康診断票の記入</li> <li>・内科処置（腹痛・発熱・過呼吸・熱中症・頭痛・吐き気等）</li> <li>・事務処理（日本スポーツ振興センター等）</li> <li>・掲示物作成</li> <li>・体力テスト</li> <li>・一日の執務計画の作成</li> <li>・保健室整備（掃除、洗濯、シーツ交換等）</li> <li>・健康相談活動</li> <li>・担任、教科担任との連携</li> </ul>
指 導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問診で原因を探る質問をし、そこから保健指導ができるようにする。</li> <li>・児童生徒に対し、どのような対応をしたかメモをする。</li> <li>・バイタルサインだけではなく、本人の顔色なども見る。</li> <li>・体調の悪い児童生徒には先に休ませ、問診表の記入は後から行う。</li> <li>・担任または教科担任に保健室に来室することを伝えているか確認する。</li> <li>・児童生徒との距離感（話し方）</li> <li>・養護教諭の対応が暗いと生徒の気分も下がる。問診は適度な明るさが必要。</li> </ul>
まとめ	<p>総合実習を実際に行ってみて困ったこと、反省したことは、どれも養護教諭として大切な基本的なことであることが分かった。大学でこれらを学んできたが、まだまだ体得したとは言い難い。実際に現場に立つ養護教諭となった時、私たちを頼りに来室する子どもたちの前では、いかなる場合でもプロフェッショナルでなければいけない。その為に今の私たちにできることは、机上で学べることを少しでも多く自分の中に取り入れることである。また、PDCAの大切さを感じた。総合実習の計画を立て、実施し終わった今、この調べを通して、振り返り、改善できるよう学び直すきっかけにできたのではないだろうか。今回の反省点を活かし、今後も学びを深めていくことで、現場に出た時に今回よりも一歩前進した養護活動を行うことができる。計画を立て（P）、実行し（D）、振り返って反省し（C）、次へ活かす（A）ことで、自らの力を向上していくことができる。現場に立った後もこのようにPDCAを繰り返すことで養護教諭の資質を高めることができる。</p>

(2) 実習前の不安との比較

実習前不安(表2)と実習および事後指導を通しての学びの変化を表12に示す。

表12 実習前不安と実習および事後指導による学びの変化

実 習 前 の 調 査				
項 目	具 体 的 内 容 (%)			
1 実習前に不安 と思うこと	対応 (36.1) 応急処置 (31.9) 職務実施の不安 (29.7) 保健教育 (25.5) 連携 (23.4) 個人研究 (17.0) 知識・行動 (17.0) 教員力 (10.6) 総合実習 (2.1)			
2 疑問に思うこと	応急処置 (34.0) 対応 (12.8) 実習の範囲判断 (12.8) 連携 (10.6) 職務分担・流れ (8.5) 校内巡視 (6.4) 現場の実態 (2.1)			
3 自分がしてき たいこと	職務の具体的活動 (29.8) 職務内容の把握 (2.1)			
4 心がけて行い たいこと	社会性 (31.9) 積極性 (14.9) 対応 (12.8) 職務の基本 (12.8) 謙虚さ (8.5) 自己管理 (4.3)			
事後指導での授業結果				
授業内容	困った場面		指 導	学生の気づき
救急 処置	問診の進め方	主症状の聞き方	処置前の問診 緊急性の有無 処置台の使用 救急車要請の有無 経験・練習 個人情報・記録 不安・痛みの緩和	幅広い知識 救急処置器材の管理 ケガの想定
	処置方法	傷口の砂が取れない 湿布と絆創膏のどちらを使用すべきか 頭部打撲 突き指		
内科 処置	対応	何も応えない生徒 薬を要求された時 頻回来室者・体調の見極め 異常がみられない生徒 教室へ帰ろうとしない 腸にガスが溜まった生徒休 養しても良くならない教室 に帰す、休養、早退 温めるか、冷やすか 炎症性かどうか 精神的下痢の対処法	日常の健康観察 薬局と保健室の役割の 違い 応急処置の範囲内 観察・知識 健康状態を把握	各学校で対応は異な る 基本的判断基準 症状、病気の理解 一人一人を観察 生徒にあった対応 知識 日常の健康観察 健康状態を把握
精神的 処置	対応	泣いた生徒 ・精神的に弱い ・理由が不明 落ち着きがない子 ・叫んでいる子 ・テンションが高い子 ・軽度アスペルガー障害	無理やり聞かない 個別の空間 連携 特別視しない 自己判断での告知 受容・共感的態度 バイタルサイン 叱責や迷惑視 傾聴 医師の診断 安心できる場 養護教諭がゆとり 焦らず対応	声のかけ方 連携の重要性 バイタルサインの重 要性
	身体的症状を 訴える	相談できる人がいない リストカット		
	主訴が分から ない	黙ったまま 理由不明		
総合 実習	判断	優先順位のつけ方 授業復帰、休養、帰宅 自分で判断しきれない	バイタルサイン・顔色 担任との連携 問診表記入は事後 問診は明るく 問診から繋げる メモの重要性 生徒との距離感	プロフェッショナル 知識の獲得 PDCA
	問診	内容が不十分		

### 3. 考察

#### 1) 実習前

今回の調査から、養護教諭志望学生は養護実習前に主に「保健室対応」「応急処置等」に不安を抱えていることが分かった。また、疑問を持っていることは、主に「応急処置」であった。

森田(2009)<sup>2)</sup>は、「学校現場で養護教諭にもっとも期待される専門性は、『医学的要素をもつ教諭』であることであろう。」と述べている。実際学校現場における応急処置は、養護教諭に最も期待されている執務である。適切な判断と処置が求められることから重視していかなければならない。「1 実習前の不安」と「2 疑問に思っていること」での回答は同じ内容であったり、「疑問に思っていること」が「実習前の不安」の具体的内容であったりしている。このことから両項目は共通していると言える。特に実習生が「疑問に思っていること」は、実際には「よくわからない」「どうしていいのかわからない」ことであり、「不安」として捉えていたと思われる。具体的には、実習中にどのような内容の実習が可能であるのかわからない。実習中に何がしたいのかわからない等のような「わからなさ」であると思われる。実習前の不安は抽象的な漠然とした不安であるといえる。養護実習に際して大学では養護教諭の執務等、基礎基本について学んでいるが、これらのことが実習校において具体的にどのように展開されるのか、イメージとして掴めていないといえる。即ち実習生自身が養護実習でどんなことをするのか十分に理解できていないことが伺われる。養護実習前の指導では、今まで履修した学びの他に実習校との事前打ち合わせも実施しているが、現場の具体的なイメージが掴めないため学生は実習中にどのような実習が可能であるのかわからない。実習校の実態に応じた様々な実習の形があるため、そこでしか学べない事実に着目させる必要がある。

実習前の不安と「3 実習中にしていきたいこと」や「4 心がけて行いたいこと」との共通性は少ないことが分かった。「対応」、「応急処置」、「知識・行動」に不安を持ちながら、実習で実際に実施していきたいことは「職務の具体的な活動」であり、内容から見ると「健康観察」、「相談」であった。学生に養護教諭を志した理由を聞くと、小、中、高等学校在学中に養護教諭に心を支えてもらってうれしかった。だから自分も児童生徒の心を支えたいと思ったと答えることが多い。現実にはいろいろな不安を持ちながら、児童生徒の「相談」を行いたいという希望を持っている。

「4 心がけて行ないたいこと」の内容に「謙虚」が挙げられていた。本学では実習指導において、養護実習や臨床実習に際して、実習は当たり前には実施できるのではなく、引き受けて下さる側の「育てる」気持ちと、実習生の「学ぼう」という謙虚な気持ちの両輪により成り立っていることを指導している。「謙虚」の記述は、この指導の成果の現れであると言える。

4つの質問項目についてカテゴリー別に考察すると、「1 実習前の不安」の回答者数は91名(48.4%)、「2 疑問に思っていること」の回答者数は42名(22.3%)であった。「3 養護実習で一番自分がしていきたいこと」の回答者数は15名(8.0%)「4 心がけて行ないたいこと」の回答者数は40名(21.3%)で、「実習前の不安」についての回答者数が最も多かった。

「1 実習前の不安」で一番多かったものは、対応36.1%であり、次は「応急処置」31.9%であった。「2 疑問に思っていること」では応急処置34.0%であり、対応12.8%であった。「4 心がけておこないたいこと」でも対応12.8%であった。実習生自身が対応に不安を抱えていることがわかった。「対応」に最も必要な要素はコミュニケーション力であると考えられる。近年、学校現場において教師自身が児童生徒はもとより保護者にも対応できない状況であったり、他者の意見が聞けず、自己判断で実施したりしてしまう事例も聞かれることからコミュニケーション力を育てていかなければならないと考える。

コミュニケーション力を育てるための一方策として、体験(ロールプレー)や話し合い、発表(プ

レゼンテーション) 活動等を取り入れた授業の展開が考えられる。また、本学が実践している小グループ単位での活動により、協同を体得していくこともコミュニケーション力を高めていく一方策であることから、積極的にすすめて行きたいと考える。

## 2) 事後指導

実習前の不安や疑問は、実習中においては現実の問題として直面する。不安や疑問は、授業の結果(表8～表11)からは、困ったこと(場面)と表現されている。

カテゴリでの分類(表6)では「1 実習前の不安」「2 疑問に思っていること」「3 養護実習で一番自分がしていきたいこと」の3項目に対応が挙げられていた。また、「1 実習前の不安」「2 疑問に思っていること」の2つの項目に応急処置が挙げられていた。事後指導の授業においても困ったことは対応が多く見られた。しかし、授業でのキーワード(表12)からもわかるように、実習後のほうがより具体的な内容となっている。実習前に持っていた漠然とした不安は実習中では現実的で具体的に捉えることができた。また、不安から困ったことの認識の変化と捉えることもできる。

養護実習で一番していきたいことは、観察・対応・健康観察、相談・健康診断・校内巡視・保健室経営・保健指導・応急処置・職務内容の把握等であった。事後指導の授業では、総合実習において保健室整備、生徒対応、など日常養護教諭が行う執務全般を実施したことから、実習していきたいと思っていたことは体験できたと思われる。

不安(困ったこと)の軽減については、実習生は、救急処置場面ですばやく対応するために起こりうるけがを想定し、処置に必要な道具をいつでも揃えておくこと、その道具の清潔を決して怠らないことの必要性を挙げている。そしてそのことが救急時の処置を臆することなく行うことに繋げられることを学んだ。また、児童生徒一人一人を観察しそれにあった対応をするために病気についての知識と日常の健康観察が重要であること等、体験というプロセスを通して理解できたといえる。現場における体験は不安を軽減させる大きな要因といえる。

養護教諭指導者は指導内容に、「経験・練習」を挙げている。このことは学校現場において多くの症例を経験したり、シミュレーションを行なったことで、救急処置の判断・処置に自信をつけ、不安を軽減させていくことを示唆している。また、実習前の不安が漠然としたものから、実習中に具体的な困ったこと(場面)として直面した時、実習生は大学での知識・技術の学びを基に、実習先での指導者からの指導助言、実際に現場での観察、体験等の学びが作用し不安は軽減される。さらにその過程を通して学生は基本的判断、一人一人を観察、生徒にあった対応、知識、日常の健康観察、健康状態を把握等、多くのことに気づくことができた。

実習前の不安は実態を伴わない漠然としたものであり、実習中の困ったこと(場面)に直面した時困ったこととして認識されていく。

## 4. まとめ

大川尚子ら(2011)<sup>3)</sup>は、学生が養護実習を充実したものにし、養護教諭への志向性を高めるためには、養護実習のための十分な準備を行なったうえで実習に臨む必要があることを示唆している。

養護教諭志望学生の養護実習における不安の軽減を図るために、養成する側として必要なことは、どのようなスタンスで実習に臨ませるのか、基本的な立場等を持ち、事前指導において実習生に理解させていくかが重要であり、必要なことであると考え。特に、養護実習に出るにあたり完成された状態で臨むのではなく、学びのライン上にあることを理解し、実習先の様々な先生方から

指導を受け、様々な体験をすることが実習の意義と捉えることが必要である。また、養護実習における不安の軽減の一考察として、「実際にやってみる」ことが重要であると思われる。そのためには、学校現場と大学が連携し、学生が現場で多くの体験をする機会を作っていくこと、また授業の中で体験的活動を多く取り入れること等が必要である。そのことが志望指向の高揚に繋がっていくと考える。さらに、本研究における、実習後の事後指導におけるまとめから、事後指導の重要性を伺うことが出来る。実習後の同級生の他校での実習経験談を聞くことにより、学校規模、校種、児童生徒の状態等により、対応のし方は様々であり一定ではないことを知る。

実習後の学生は、普段授業で学んでいること全てが養護教諭の職務に繋がっていると改めて感じているものの、まだまだ体得したとは言い難い状態にある。しかし、実際に現場に立つ養護教諭となったとき、自分を頼りにして来室する子どもたちの前では、いかなる場合でもプロフェッショナルでなければいけない。その為にも今の自分にできることは、机上で学べることを少しでも多く自分の中に取り入れていかなければならないと感じている。また、PDCAの大切さが理解できた。現場に立った後もこのようにPDCAを繰り返すことで養護教諭の資質を高めることができるであろうとまとめている。これらの学びは事後指導によって明らかになったことである。実習後の実習指導（事後）により、実習中に困ったことや・対応等をまとめて発表したり、他のグループの発表を聞いたりすることで、学び直すことができています。また、校種、規模、地域等の違う他の学生の経験を見聞きすることで自他の学びをシェアすることに繋がり、より深い学びとなったと捉える。しかも、学生のみならず養成に携わる教員においても、学びをシェアする対象となることから、事後指導の意義は大きいと言える。実習前から実習後までの学びについて図1のように捉えることができる。

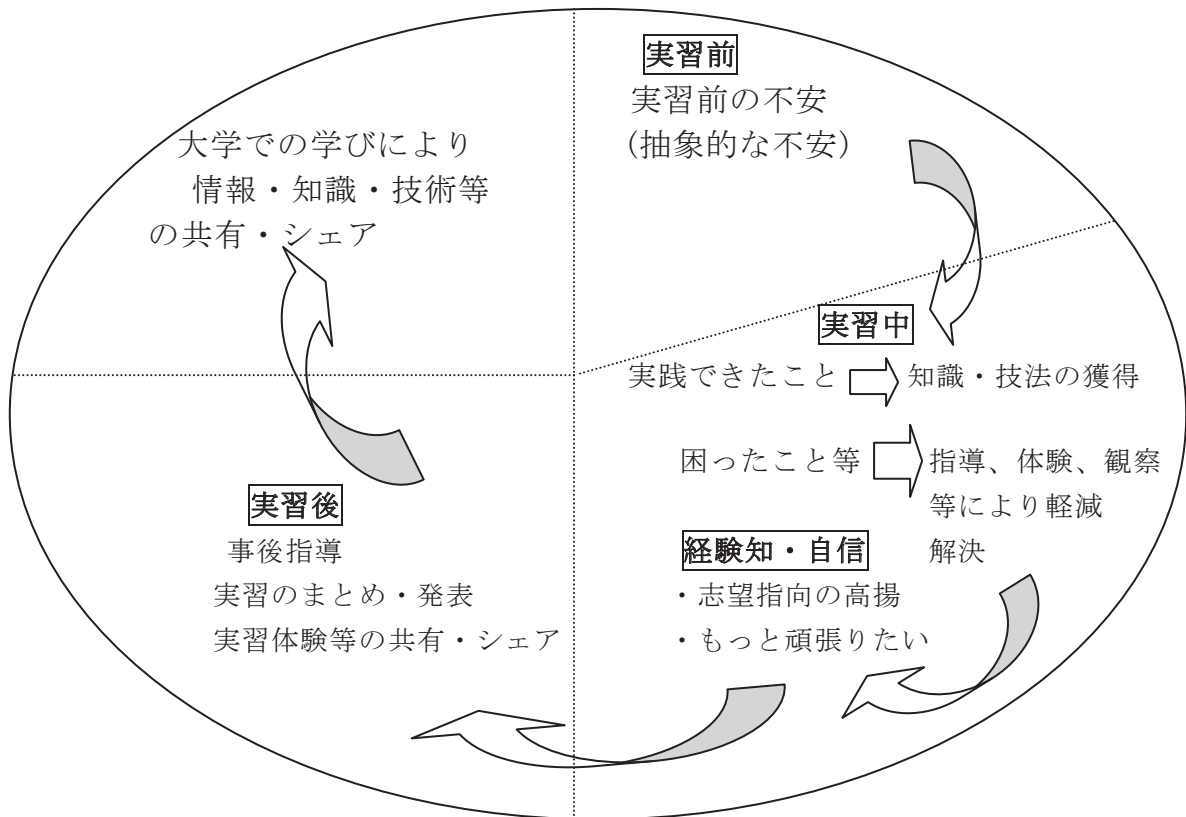


図1 実習前から実習後までの学びのサイクル

### 《引用文献》

- 1) 大谷尚子, 大原榮子他: 実習生が望む養護実習中の指導者像, 教師教育学会, 2008.
- 2) 森田光子: 養護教諭から見た学校での医療的ケア, 学校保健研究, 43号, 373-379, 2001.
- 3) 大川尚子, 倉恒弘彦他: 学生の養護教諭への志向性と養護実習の自己評価満足度との関連, 関西福祉科学大学紀要第15号, 121, 2011.

### 《参考文献》

- 石井康子, 泊祐子他: 養護実習における養護教諭の指導の現状と教育上の課題, 岐阜県立看護大学紀要 第10 巻 2号, 2010.
- 今林俊一, 有馬博幸, 川畑秀明: 教育実地研究に関する教育心理学的研究 (10), 鹿児島大学教育学部研究紀要, 教育科学編第60巻, 108-121, 2009.
- 鈴木郁美, 河田史宝他: 養護実習における学生の経験と不安内容 —教育系養護教諭養成課程に着目して—, 茨城大学教育実践研究29号, 165-177, 2010.
- 堀内久美子, 天野敦子他: 養護教諭養成課程の学外実習に関する研究 —第4報 養護実習の現状分析—, 愛知教育大学教科教育センター研究報告第16号, 67-78, 1992.
- 善明宣夫, 南本長穂: 教育実習の研究 (1) —実習生の不安を中心として—, 関西学院大学, 2003.
- 神波幸子, 谷口純世他: ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティの芽生え—社会福祉実習教育を通しての一考察—, 医療福祉研究 第1号, 2005.